

不登校をやっつける!

第4回

親子奮戦記

名和隆子
(塾講師)

熱血教師 S先生との出会い

●前回までのあらすじ

小学校3年生の頃、子どもが学校に行かなくなり、私は中学校講師の仕事を辞め、親子で「子どもの心のクリニック」に通い始めました。

「あなたの人生でしょ!」

2005年、洋平は5年生に進級しました。5年2組、S先生との出会いのクラスです。

S先生はベテランの女性教諭、すでに洋平の不登校について十分な情報を持っておられ、「学校全体で見えていくから、あせらずやっつけていこう。」と励ましてくださいました。S先生の励ましもあって、4月は週1〜2回程度の遅刻でなんとか普通に登校できていたものが、ゴールデンウィークも終わる頃には、またずるずると行かなくなりました。

ある日、家にS先生から電話がかかってきました。

「お母さん! 学校では毎日毎日、みんな新しい課題をこなしてるのよ。洋平がその体験をしないているのは大きな損失だと思う。彼は学校に来さえすればちゃんとやれるんだから、朝だけが問題なんだったら、私が起こしにいこうか?」

これはとてもありがたい言葉でした。私は遠慮もなく、「はい、お願いします。」と答えていました。

S先生は40人のクラスを抱えた忙しい身でありながら、毎朝8時前に「洋平は起きたか?」と電話をくださいます。「すみません、起きていません……。」というところ、「わかった、じゃ、行くから。」——すぐにきりりとしたジャージ姿でさっそうと現われ、洋平が寝ている布団

の上までやってきて、彼の体をおこし大声で言います。

「洋平! あんた何やってるの! それでいいの? せつかくできる力を持つてるのにそんな無駄な使い方を、しつかりしなさいよ! みんな待つてるのよ、一日をそうしてたらだらすごしていやにならないの!」

洋平の両肩をつかんでゆすりながら、大声で一歩も引かない様子です。「だってお母さんが!」と洋平が目をもむけると、「お母さんは関係ない! あんたの人生よ。自分で納得して、してるんなら何も言わない。でもそうじゃないなら、先生と一緒にいこう! 早く着替えて! お母さんはそのごはんをおにぎりにして!」——登校のしたくを終えた洋平はS先生に手をひかれ、おにぎりをかじりながら元気に手を振って登校していきました。

子どもが朝から学校へ行く。友達と一緒に新しい体験をし、その日を小学生として過ごして、家に帰ってくる。それがこんなにも心の晴れる、安堵に満ちた、喜ばしいできごとだとは。でもこれは、不登校がなおったということではありません。自分の意思で学校へ行くのではなくS先生の熱意におされて、いわばS先生のために登校しているので、先生が来られなくなったら、また元に戻るでしょう。そしてその日は、意外と早くやってきました。S先生は学校の運動会運営の役につくことになり、毎日早朝に学校へ向かわなくてはならなくなりました。

(つづく)